

ストラスブールで学んだこと

文学部 Y.Y

ストラスブールでの二週間を思い返してみて、何を学んだか、どんなことを得たかを振り返ってみた。

最初に、フランス語の学習についていうとリスニングの力が向上したと感じた。今まで名古屋大学の言語の授業でもフランス語を学習してきたが文法の授業はすべて日本語であった。会話の授業はフランス人の先生だったが日本語を話すことができたのですべてをフランス語で会話する必要がなかった。しかし今回の研修では当たり前だが講師は日本語を話すことができない。最初の授業ではフランス人講師の言っていることが聞き取れず、本当にフランスでやっていけるのかととても不安になった。それは宿舎での食事や買い物をするときも同じであった。食事の説明をされても、レジなどで店員に何か話しかけられてもほとんど何を言っているのかわからなかった。それでもだんだん耳が慣れていって授業ではだいぶフランス語を聞き取れるようになった。そして研修のちょうど一週間目にアルザスの家庭訪問があった。そこで私はフランス語での会話の難しさを思い知らされることとなった。授業で勉強としてフランス語を使うことと、実際の会話のなかでフランス語を使うことにはかなりの違いがあった。実際にフランス人の家族にまじって会話をするほうが何倍も難しかった。授業で出てくる単語はその分野によってだいぶ限られてくるし、講師もフランス人とはいえ私たちにフランス語を理解してもらおうとして話しかけてくる。しかし家庭訪問での会話は無限に広がるし、自分の頭で文章を組み立てなければならない。伝えたいことがあっても単語がでてこないこともたびたびあった。自分で話せることも大切なことだが、話しかけられたことや質問が理解できないと会話ができない。聞き取る力の大切さを学んだ出来事だった。二週目の授業や施設の見学でフランス語を聞くときは、それまではどちらかという文を全体的に聞いていたが、それと合わせて一つ一つ単語を意識して聞くようにした。すると今まで聞き落としていた単語を聞き取れるようになっていった。

次に、自国の文化はもちろん他国の文化に興味をもつこと、さらにそれを自分の目で見て体験することの大切さを感じた。ストラスブール大学日本語学科の学生と交流する機会があったが、その学生たちは日本の文化について驚くほどよく知っていた。日本文化といっても、一般的に知られている京都などのイメージだけでなく、実際に住んでみないとわからないような現在の日本の流行、例えばキャラクターなどを知っていたから驚いたのである。加えて彼らはストラスブールを案内してくれた。私も彼らのように興味を持った国があっただろうか、自分の地方の文化について自信をもって説明できるだろうかと考えてみて少し恥ずかしくなった。また今回実際にストラスブール、パリ、コルマルールに行ってみて、他国文化のなかに身をおくことの大切さを学んだ。パリの有名な美術館や建物を見ることが勉強になったし感動したが、ただストラスブールで生活をするだけでも、初めて

海外に行った私にとっては十分な驚きがあった。それらが何に結びつくのかは言葉ではうまく説明できないが、いうならば人として幅を広げるために、より豊かにするための体験だったと思う。

ストラスブールで過ごした二週間は本当に楽しかった。今回の研修で学んだこと、反省したこと、悔しかったこと、そしてさまざまな思い出をばねにして活かし、これからのフランス語の学習につなげていきたい。フランスだけでなく、もっといろいろな国へ行って学び続けていきたい。